

山本竟山とその書学の影響

——関西大学竟山コレクションをもとに——

蘇

浩

The influence of Kyôzan Yamamoto and his calligraphy

—Based on “Kyôzan Collection” in Kansai University—

SU Hao

The main objective of the present study is to reveal the influence of kyôzan Yamamoto and his calligraphy, basing on “Kyôzan Collection” in Kansai University. Kyôzan Yamamoto, a famous modern calligrapher (1863-1934; real name Yoshisada Yamamoto; born in present-day Gifu-ken). Kyozan went to China seven times, supported in many ways by various members of the modern literati such as calligraphers, scholars, collectors, politicians and publishers from Japan and China. Specifically, I examine several materials and letters related to his collection, I also examine communications related to “Shodô kai (書道会)”, with reference to the correspondence of various members to consider the importance of “Shodô kai” in the history of modern Japanese calligraphy. Based on the foregoing, I further investigate kyôzan's inscription of the epitaph, writing activities, calligraphy education and publication.

Keywords: kyôzan Yamamoto, calligraphy, Kyôzan Collection, Calligraphy world in Kansai

キーワード：山本竟山、書学、竟山コレクション、関西書道界

一 竟山の収蔵品

山本竟山は、七回（1902, 1903, 1906, 1910, 1912, 1921, 1930）にわたって中国に遊学し、多くの文人たちとネットワークを築き、北碑書法の真髄を習得したほか、大量の書画作品や碑版法帖、骨董品などを入手した。また、日本においても長年培った鑑識眼によって、竟山は数多くの作品を蒐集した。1934年に竟山が亡くなった後、大部分の所蔵品は二回京都のオークションで売り出された。目録（図1）『故山本竟山先生遺愛品及某家入札目録』（会場：京都美術倶楽部、昭和9年4月27日）と『故山本竟山

先生御蔵書売立目録』（会場：昭和図書館¹⁾，昭和9年9月24日）の二冊があるが、『入札目録』のみが残され、そこに掲載された遺愛品の数は千五百点以上に達している。それらは、絵画、書幅、扁額・屏風、書籍、法帖、拓本、茶道具、宣紙・色紙、硯などの文房具、香合などの文人雅物の多岐に分類され、主に日本と中国のものに集中しており、朝鮮のものも少数存在していた。以下の表（表1）で、日本・中国・朝鮮に分けて簡単に分類し、有名な作者だけを記しておく。

表1

日本	中国	朝鮮
絵画、書幅、屏風、茶道具、香合、香炉（主に江戸、明治、大正）	法帖、拓本（宋拓・明拓）、絵画、書幅、扁額、古唐紙、宣紙、硯、墨、香合、香炉（主に明、清、民国）	絵画、朝鮮紙
狩野探幽、伊川院、英一蝶、表千家如心斎、富岡鉄斎、長谷川玉峰、今尾景年、慈雲尊者、貫名菴翁、巻菱湖、犬養毅、竹内栖鳳、巖谷一六、鳴鶴	顔真卿、董其昌、文徵明、王鐸、祝允明、何子貞、楊見山、潘存、吳昌碩、楊守敬、羅振玉、顧鶴逸、金心蘭、翁同龢、蒲華、鄭孝胥、梁啓超	安心田

昭和58年（1983）3月27日に、山本竟山先生五十回忌追悼会が京都で行われ、図2の「山本竟山先生五十回忌追悼会 遺墨・愛蔵品展目録」（146点）が出版された。ただし、1996年に起こった阪神大震災の時、一部の蔵品が無くなったという。ほかに、将来品目録が現存し、竟山の第四回（明治43年、1910）と、第五回（昭和5年、1930）の中国遊学に際して集められた蒐集品目が記されている。具体的に記すると、第三回の自筆である「庚戌所獲品目」（図3）と、第五回の『月曜会誌』（昭和5年7月）に掲載された「山本竟山先生渡支御将来 金石法帖展覧目録」である。「金石法帖展覧目録」は、1930年5月18日に京都華道倶楽部で開催した展示に基づき、「全拓」「拓本」「集拓」「其他」という四つの品目に分けて一枚刷になったものであるが、現存していない。「庚戌所獲品目」は、竟山が列記した八頁の目録で、具体的には次の通り（字体は原文と一致）である。

乾隆帝石渠秘笈細楷文衡山古詩十首、王鐸臨右軍狂草長條幅、董其昌臨晋唐宋名賢四十四頁大帖神品（我家第一墨宝、得此帖自称宝董室）、周散氏盤原形並銘豎幅、周漢金文拓本、漢三老忌日碑（左辺未断本）、宋拓絳帖零本、漢石門頌精拓本、漢封龍山碑、漢葉子侯碑、晋太公呂望表、齊張龍伯造像、齊宋買廿二人造像、魏安定王造像、齊馬天祥造像、魏中岳嵩高靈廟碑與陰、唐八都壇神君実録（垂拱元年）、魏李超墓誌原拓、崔顧墓誌写真版、旧拓米南宮法書、陳奕禧華嶽題名記、文衡山細字千字文、聖武帝宸翰写真版、百万塩陀羅尼全、魯公斐將軍詩帖、匄齊杏金錄大本八冊、過雲樓書画記四本、宋板覆刻鉄華館本六本、缶廬詩、宋四家真迹写真版一帙、国朝画家書一帙、二百蘭亭齊古印攷藏二本、楊見山臨漢碑四種拓本屏幅、胡鉄梅仇淞之合作扇面、金石書画写真版三十六頁、全元張伯兩山水、全冷謙山水二、絹本衛鑄生行草冊頁一件、秦漢録印浜虹集一本、漢瓦鳳（朱拓）・千秋萬歳（墨）・萬世無疆（朱）三當文拓本豎幅、明刻水晶獅子紐（高二寸ハト印面、一寸ニト方）、雞血小印、漢玉（漢人刻）、古銅、石印（刻者未明）、白蠟、黄蠟、寿山石（陸岱生刻）、全星舟刻二

1) 昭和2年に竣工された京都書籍雑誌商組合立昭和図書館で、昭和20年に立ち退かされた。

枚、靈壁石（高四寸六ト、有白帯）。

明清の書幅、漢魏の碑と瓦當文などの拓本、明清の法帖、名人扇面、宋板書籍、書画実録、造像、原石、石印さらには真跡の写真版等、以上の五十点が記されている。

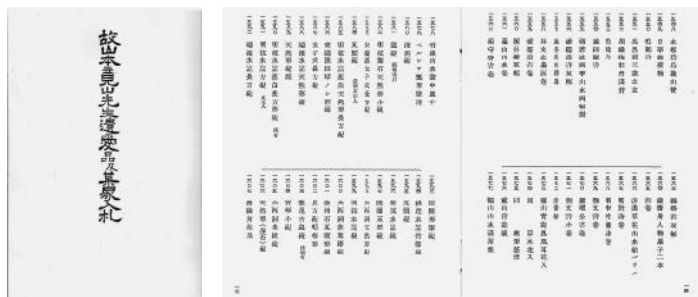


図 1

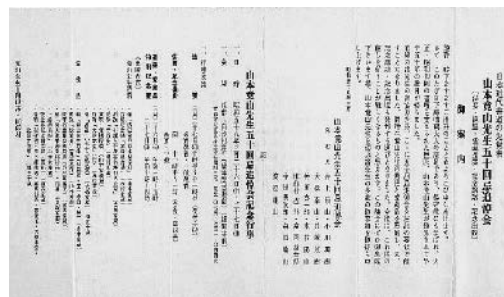


図 2

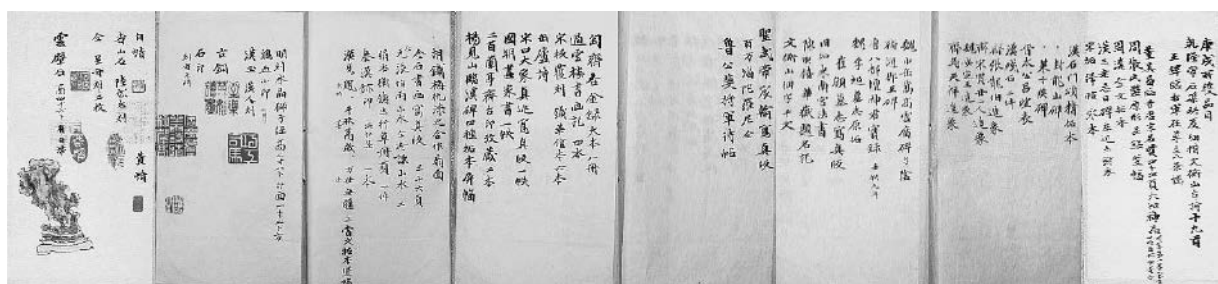


図 3



図 4



図 5

蒐集品のうち、特筆に値するのは『餘清齋帖』（図 4）である。楊守敬から入手した精刻で計八冊の『餘清齋帖』は、徽州の大収集家である呉廷が所蔵の晋・唐・宋の名品の真蹟にもとづいて刻した法帖である²⁾。帖首に董其昌による「餘清齋」の三大字が題字として墨書され、第一冊に王羲之「十七帖」、第二冊に王羲之「遲汝帖」・「蘭亭序（張金界奴本）」・「樂毅論」・「黃庭經」・「霜寒帖」、第三冊に王羲之「行

2) 宇野雪村『法帖事典』に、清の王澐、近人の張伯英、容庚らの木刻説、楊守敬の石刻説の両説があったが、原石が発見されたことにより石刻説の正しさが証明された。

穰帖」・「思想帖」・「東方朔画賛」・「鴨頭丸帖」, 王献之「洛神賦」・「十三行」, 第四冊に王珣「伯遠帖」, 王献之「中秋帖」・「蘭草帖」・「東山帖」, 智永「婦田賦」, 虞世南「積時帖」, 第五冊に王羲之「胡母帖」, 謝安「八月五目帖」, 顔真卿「蔡明遠帖」, 第六冊に孫過庭「千字文」, 顔真卿「祭姪稿」, 第七冊に蘇軾「赤壁賦」, 米芾「千字文」, 第八冊に米芾「評紙帖」・「臨王羲之至洛帖」を収録している。竟山は、この集帖をととても気に入る、特に下線部の作品を何度も臨書した。さらに、書学院によって出版された大正13年の『余清斎法帖』, 及び昭和56年の『餘清斎帖』は、竟山-日下部鳴鶴-比田井天来蔵本をもとに、竟山蔵本(図4)と照合して拓本を精選して影印したものである³⁾。書道史における重要な位置付けである『餘清斎帖』は、竟山がまさにその日本伝来の第一人者といえるが、今なお書道学習の名帖であるとして受け継がれている。ほかの残された逸品は、図5の『唐拓九成宮醴泉銘』(欧陽詢)で、珍品である故、楊守敬と端方の跋文が付されており、竟山の楷書の書風に影響を与えた。また、図6の「東坡自写小像拓」⁴⁾は、長尾雨山と富岡謙蔵が主催した寿蘇会に使われたようである。



図6



図7



図8

竟山は、中国の有名な碑法帖を蒐集したほか、当時交流した日中文人たちの作品を収蔵した。以下に、幾つかの例から竟山の人脈を考察していく。図7の扁額は、壬寅(1902)冬に翁同龢が書した行書「能嬰兒」⁵⁾で、竟山がいつ入手したかは未詳である。翁同龢(1830~1904)は、江蘇省常熟出身、清末の政治家・書家である。字は叔平、号は松禅、晩年は瓶庵居士と号した。1856年に状元となり、同治帝と光

3) 他に、中村不折蔵本を袖珍本として昭和13年に刊行されたものがある。

4) 釈文：戴行之摹刻蘇東坡自写真小像並跋本軸。咸豐七年丁巳閏五月下澣，余同王子樸臣洞庭觀荷。返棹訪馬君信齋於瀘川，一見如故。出示秘藏書畫真跡。展玩竟日，歡喜無量。嗣見蘇文忠公自寫小像，黃文節公題贊巨冊。筆精墨妙，冠絕今古。意欲借刻傳世，主人慨然許之。拜而持歸，爰倩戴行之摹勒上石，以公同好。此入夏以來第一賞心樂事也。星江齊學裘玉谿甫識於共門天空海潤之居。

5) 「能嬰兒」は、おそらく老子『道德經』の「專氣致柔，能嬰兒乎」(気を專にし，柔を致いたして，能くよく嬰兒たらんか)によるものであろう。

緒帝の師を務めた。歐陽詢、褚遂良、米芾、董其昌などの名家に習い、その書法の造詣は精妙である。図8の扁額は、康有為筆「天上人間七言詩」（天上人間千往還，而今遊戲在人間。生民同患何忍去，木石与居犹自頑。一天山人天扈詩。康有為）であり、康有為の揮毫と竟山の入手の年月は未詳である。康有為（1858～1927）⁶⁾、清末民国初期の有名な思想家・政治家・書家であり、特に碑学を深く研究していた。包世臣（1775～1855）の『芸舟双楫』⁷⁾に倣って、『広芸舟双楫』（1893）を著して帖学を否定し、碑学の啓蒙に努めた。竟山はこれからある程度影響を受けたと推定される。そのほか、注目に値するのは、何維樸から竟山に贈られた行書七言対聯（図9）で、「竟山仁兄大人雅正。奇功誰續伯倫頌，妙意要與淵明論。詩孫何維樸」と書かれている。何維樸（1842～1922）は、中国の有名な書家何紹基の孫であり、書画や漢詩文を得意とし、祖父何紹基の書風と非常に似ている。

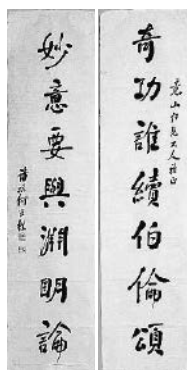


図9

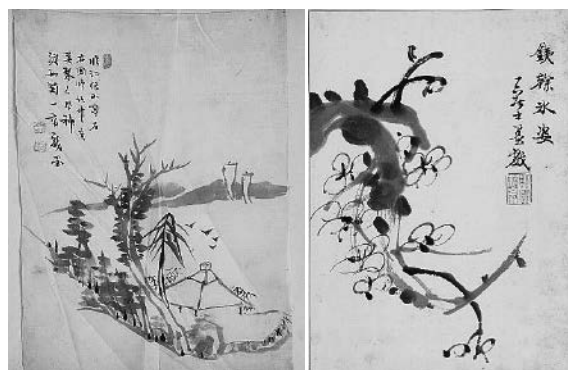


図11



図10

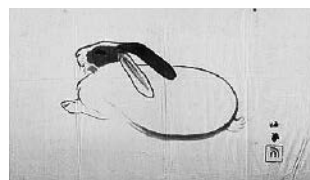


図12

一方、竟山の収蔵した日本文人の作品が少ない。図10の禅味がある扇面は、犬養毅筆「菜根図」（咬白菜根百事可成，木翁戯）である。犬養毅⁸⁾（1855～1932）は、生涯の大半は政治活動に注がれたが、漢学の素養から書や文房具にも詳しく、その所説は『木堂翰墨談』に収められている。また自らも書を善くした。漢籍への浩瀚な知識をもとに、揮毫する場合が多く、書風は清廉で鋭さと伸びやかさを兼ね備えたという。竟山とは日頃より文墨の交わりが多く、時折山本家にも質素な服で来宅した。特に、竟山の主催した和漢法書展覧会（1913年12月）において、積極的に出展した。犬養は、清末に続々と日本に流入する中国書画を親交のある政財界の同好の士へ斡旋し、その保全を図った。ほかに、巖谷一六筆二点の墨画（図11）が現存しているが、それぞれ「（左）鉄幹氷姿，一六居士戯墨。（右）臨江結小亭，左右囲修竹。中有美琴人，風神澹如菊。一六戲墨」と題賛している。巖谷一六（1834～1905）は、滋賀県水口出身の官僚，書家。本名は修。字を誠卿といい，一六は号で，別号に古梅，迂堂，金粟道人など

6) 字は広厦，号は長素，広東省出身である。日清戦争の敗北から明治維新を範とした，立憲君主政体への変法自強を上書して，光緒帝を動かし改革（百日維新）に着手したが，西太后中心の保守派に弾圧され（戊戌政変）失敗した。

7) 包世臣は，書を好み，欧陽詢，董其昌らの影響を受け，のち北碑に力を注ぎ，晩年はまた王羲之の風を好んで書いた。阮元の「南北書派論」，「北碑南帖論」を受けて北碑に注目し，この説を自著の『芸舟双楫』によって補訂され，北派の理論が打ち立てられた。

8) 字は子澳，号は木堂，岡山生まれで，昭和初期に総理大臣となった。

がある。日下部鳴鶴、中竹梧竹と並ぶ明治三筆の一人であり、絵画にも秀でていた。さらに、戦前の京都画壇を代表する帝室技芸員である竹内栖鳳（1864～1942）筆の「兎図」（図12）があり、筆の運びは限られているが、小さくて丸っこい兎の体の線が的確に表されている。近代日本画の先駆者であり、動物を描けば、その匂いまで描くといわれた達人であった竹内栖鳳は、対象をつぶさに観察して、実物の写生を重視して描き、「写生と省筆」を提唱する絵画観がよく感じられ、「兎図」は竟山の名「卯兵衛」に因んで描かれた絵画だと推測される。

竟山は、日中両国での数多くの蒐集を通して、大正昭和期の日本書道界に刺激を与えつつ、そのうちの優れたものを広めた。具体的には、京都蘭亭会・和漢法書展覧会・赤壁会・寿蘇会・清朝書画会において積極的に蒐集品の展示に協力した。また、自分の鑑識眼と書法を鍛えると共に、政治家・書画家・文学者との交流のネットワークで人脈を築き上げた。加えて、日中の有名な書家に師事して、竟山の日本国内での人望は厚く、書道界へ大きな影響力をもった。次に、竟山の書道会・揮毫・出版における活躍ぶりを考察したい。

二 書道会への尽力

香取氏は『台湾日々新報』を利用し、台湾勤務時代に竟山が、数回にわたって展覧会や書道研究会、揮毫会などに参加したほか、自ら主催したことを明らかにした⁹⁾。具体的には、台湾書画会員の席上揮毫会（1904、揮毫）、淡水館の書画展覧会（1905・1908、自作出展）、淡水館の新古書画（1905、自作出展）、竟山社中の清書会（1905、蒐集品を展示）、古書画展覧会（1908、協賛）、共進会の書画会（1908、自作出展）、台湾書画会（1910、自作出展、竟山揮毫会（1912）、阿羅漢会例会（1912、参会）などが挙げられる。植民地時代の台湾書法界で積極的に活躍しており、台湾の書道発展及び碑学書法の伝播に貢献をした。

1912年冬、京都に帰った竟山は、大正2年（1913）10月19日に、呼びかけ人として「平安同好会」を発足させ、毎月の例会では書に関する活発な意見交換を行い、そこには京都の著名な文人書家たちが参加した。大正3年（1914）の冬に、長尾雨山は、中国から京都に帰り、内藤湖南とともに「平安同好会」の一層の発展を促進させ、大正9年（1920）1月に名称を「平安書道会」と改めて、研究と書芸両面の研鑽に力を注ぎ、正式の会合として発足させた。「平安書道会」は、昭和6年（1931）に初代会長と副会長に荒木鳳岡と長尾雨山を迎え、内藤湖南と山本竟山が顧問に就任した。のちに、学識と技術両面の研鑽を目的として活動し、また恒常的に公募展を開催したことにより、新進書家の登竜門ともなって盛況を呈し、会誌を発刊した。竟山は、先覚として尊ばれ、書作が何度も会誌（図13）に掲載された。他に特記すべきは、のちに内藤湖南と主唱する大正京都蘭亭会（1913）や、長尾雨山と富岡謙蔵が主宰する寿蘇会（1917、1918、1919、1920）と赤壁会（1922）にも積極的に協賛・参加した。竟山は平安書道会をはじめとする数多くの書学団体の役員として、大正期と昭和初期の書道普及活動に貢献したが、その点については以下の具体例で検討したい。

9) 香取潤哉「昭和書豪」山本竟山—日本治台時期旅台書家研究」, 台湾芸術大学修士論文, 2016年, 73～94頁。

①大同書会から評議員就任依頼書

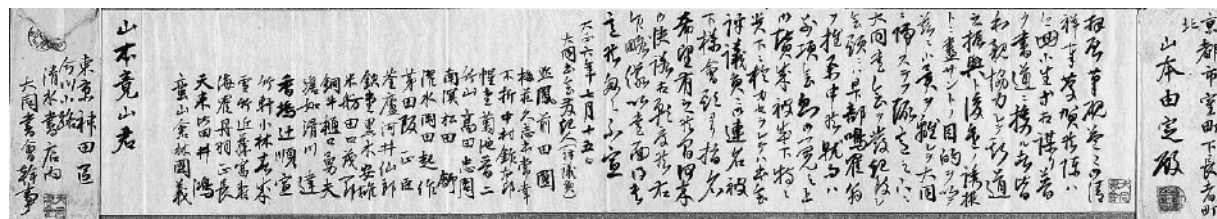


図14

図14釈文 表：京都市室町下長者町北。山本由定殿（消印：大正6年7月19日）。

裏：東京神田区今川小路清水書店内大同書会幹事（朱文方印：大同書会）。

拝啓、筆硯益々御清祥、奉慶賀候。陳バ今回小生等相謀り、普ク書道ニ携ル者皆和親協力シテ、斯道之振興ト、後進ノ誘掖トニ尽サントノ目的ヲ以テ、茲ニ小異ヲ離レテ大同ニ帰ステフ趣意之下ニ、大同書会ヲ發起致シ、会頭ニハ日下部鳴鶴翁ヲ推挙申候。就而ハ別項会則御一閱之上、御賛成被成下、特ニ貴下ニ於カセラレテハ、本会評議員ニ御連名被下様、会頭ヨリ指名希望有之候間、何卒御快諾相願度候。右乍略儀、以書面得貴意度。勿々、不宣。大正六年七月十五日、大同書会發起人（評議員）：默鳳前田圓、梅莊久志本常幸、不折中村鉦太郎、惺堂菊池晋二、竹山高田忠周、南溟松田舒、濯水岡田起作、茅田阪正臣、荃盧河井仙郎、欽堂黒木安雄、米舩田口茂节、銅牛樋口勇夫、澹如滑川達、香塙辻順宣、竹軒小林春成、雪竹近藤富寿、海鶴丹羽正長、天来比田井鴻、蜜山倉林国義。山本竟山君。

大正6年（1917）5月13日、日下部鳴鶴の傘寿（八十歳）を記念し、鳴鶴を会頭とする「大同書会」¹⁰⁾が東京で結成され、鳴鶴の命により比田井天来が大同書会の経営者となった。幸田露伴、後藤朝太郎、高田竹山、黒木欽堂、犬養毅、中村不折らといった執筆陣のもとで機関誌『書勢』（編集長井原雲涯）が10月に発刊され¹¹⁾、日中の書論、書評、文房具、漢詩、俳句という多岐にわたる内容が掲載され、これを以って創業となった。図15の写真は、大正12年の大同書会奈良支部大会懇親会の写真で、前列左から高畑翠石、井原雲涯、丹羽海鶴、比田井天来、益田石華、近藤石竹、山本竟山、神楽井卷石、久志本梅莊である。竟山は、先生鳴鶴の大同書会を支持し、評議員就任の依頼を受け、書会の発展と活躍に尽力した。

10) 大同書会は、日下部鳴鶴によって発起された同好会（明治27年）、同好会から変更された談書会（明治40年）から変更された書道会である。

11) 宮澤昇編著『書道雑誌文献目録』、木耳社、2014年、105頁。



図13



図15（第一列右から三番目は竟山）



図16

②関西書道会から展覧会の審査長就任依頼状

図16積文 本会第一回書道展覧会開会に際シ、貴下ニ審査長ヲ嘱託致候間、御兼諾被成下度、此段得貴意候。敬具。昭和六年十月二十四日。関西書道会会頭関一（朱文方印：会頭之印）、山本竟山殿。

図16の書簡は昭和6年（1931）10月24日、関西書道会の会頭の関一より、竟山への第一回展覧会の審査長就任依頼状である。関一（1873～1935）は、社会政策学者・政治家であり、二十年間大阪市助役や大阪市長などを歴任した。関西書道会の会員が大阪、神戸、奈良を中心に集結し、1931年10月24日発会式を興し、竟山は式に出席した。川谷尚亭¹²⁾（1886～1933）の甲子書道会の機関誌「書之研究」10月号には、関西書道会の会則と役員名が載せられ、さらに次の頁には平安書道会の役員一覧表も掲載された。この記載から、竟山と深いゆかりのある京都の平安書道会と関西書道会とが二分されたことが明白になる。続いての「書之研究」11月号には、第一回の展覧会規定を掲載した。注目されるのは、その中の「審査および鑑査員」に竟山が関西書道会の審査長を担当していたことである。実に、関西書道会では、第一部「漢字書」と第二部「かな書」が分かれ、審査長である竟山は、両部を総帥し、初期の書道審査の活動に尽力した。

③泰東書道院から展覧会の審査顧問就任依頼（三枚）

図17積文 封筒：京都市上京区中筋通石薬師北口山本竟山殿（消印：昭和7年5月16日）

拝啓、新緑の候、益御清穆奉賀し、陳者今回泰東書道院規約等依り、貴下を総務に御委嘱致し間、斯道之為御尽力被下度、此段及御依頼。敬具。昭和七年五月十二日。泰東書道院会頭伯爵清浦奎吾山本竟山殿。

図18積文 拝啓、益御清安奉賀候。然者本院第三回展覧会を来る十一月二十四日より十二月五日ま

12) 川谷尚亭（1886～1933）、高知生まれの書家で、1906年から上海の東亜同文書院に在学した。大正13年（1924）に大阪で甲子書道会を興し、機関誌『書之研究』を創刊し、昭和3年（1928）に名著『書道史大観』を発行した。

で、上野公園東京府美術館に於いて開催に決し、別紙の通り貴下を審査顧問に御委嘱相成候間。御繁忙中、恐縮に候へ共、御尽力被下度、此段御依頼申上候。敬具。昭和七年九月一日。泰東書道院総務長 関直彦、山本竟山殿。

図19 積文 本院第三回展覧会審査顧問ヲ囑託致候。昭和七年九月一日。泰東書道院会頭伯爵清浦奎吾（白文方印：泰東書道院会頭之印）、山本竟山殿。

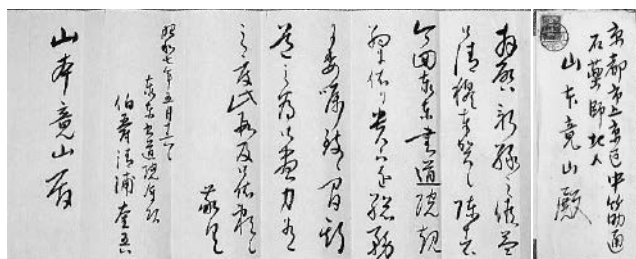


図17



図18

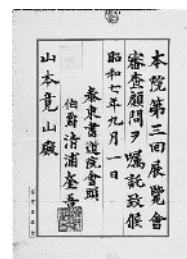


図19

図18～図19の書簡は、昭和7年（1932）に、泰東書道院から竟山に出された展覧会の審査顧問就任依頼状である。図18の依頼状による展覧会の会期は、11月24日から12月5日であることが分かり、また図18と19の依頼状は9月1日のものである。一方、図17泰東書道院会頭の清浦奎吾からの書簡は、会期よりおよそ半年前の5月16日に書かれた依頼書なので、清浦奎吾が竟山を重視する胸中を窺える。清浦奎吾（1850～1942）は、政治家、伯爵、貴族院議員、司法大臣、農商務大臣、内務大臣、枢密顧問官、枢密院副議長、枢密院議長、第二十三代内閣総理大臣などを歴任した人物である。大正13年（1924）8月、豊道春海（1878～1970）が、当時のほとんどの書家を結集して「日本書道作振会」を創立し、豊道は第二代会頭に推戴された。竟山はその会員であり、第二回展覧会における29名の審査員の一人でもあった¹³⁾。しかし、昭和3年（1928）7月、長谷川流石（1888～1958）などの8人を発起人として、日本書道作振会から分離した面々が「戊辰書道会」を結成した。竟山はその8人の発起人ではないが、日本書道作振会から離脱し、昭和3年（1928）9月の戊辰書道会第一回展の陣容に属した。竟山は、副会頭と第一審査員との間に連ねられた5人の中の1人であり、おそらく顧問に委嘱されたのであろう。戊辰書道会の結成から二年後の1930年6月、日本書道作振会と戊辰書道会が統合して、新団体「泰東書道院」が結成された。結成早々の第一回展の規程によって、竟山の名前は16人の審査顧問に連なっている。竟山の書道実技の実力のほか、泰東書道院との深いつながりや、また、後の第三回展における審査顧問への抜擢なども、審査顧問就任の一つの原因ではないかと思われる。

以上のように竟山は、大正・昭和にかけて書道会を発足させ、複数の書道会の顧問や審査員（長）を担当したことなど、書道界での活躍ぶりを示している。また、こうしたことから、竟山の書道界での位置付けと、近代の主要書道団体の成立、展開及びその変遷の一側面を窺うことができるであろう。

13) 中西慶爾「書壇百年史話〈戦前編〉」、『墨・近代日本の書』、芸術新聞社、1981年、120頁。

三 碑石揮毫と代書活動

明治37年（1904）、竟山は日本政府の要請により植民地台湾へ赴任し、八年間台湾書壇の重鎮として様々な活動を行い、台湾書道の発展に大きく貢献をした。明治39年（1906）と45年（1912）の『台湾総督府文官職員録』に、竟山が着任した「総督官房秘書課嘱託」という職位と俸給の記録が残されている。また、『台湾総督府及所属機構公文類纂』に、竟山に対しての賞与が記録されている。香取潤哉氏の研究を参照すれば、台湾勤務の間に、竟山は総督府の嘱託として「台湾教育功勞者之碑」（石碑、1905年）、「近藤昌之碑」（石碑、1905年）、「北投新圳改修三十周年慶祝紀念碑」（銅碑、1906年）という三基を楷書で書丹し（どちらも当時台湾総督府の長官である後藤新平による篆題された）、そのうち「近藤昌之碑」のみが現存する¹⁴⁾。また、香取氏の研究では、三基の揮毫の内容と書風が細かく考察されている。それは個人の功績と事業の記念を謳う内容であり、竟山の欧陽詢や褚遂良、日下部鳴鶴に影響された独特な書風であることが明らかになった。

一方、日本での碑石揮毫について、渡辺龍山氏がまとめた『竟山先生書金石拓本集』などの資料に基づき、以下の表（表2）にまとめる。主に個人の墓碑、名人・事業の記念の碑石、名所の立碑という三つの項目に分けられている（年代が付いていない項目は年代不明）。

表2

所在	個人の墓碑	名人・事業の記念の碑石	名所の立碑
滋賀		中邨確堂先生之碑（漢文） 従一位大勲公爵徳大寺實則篆額・従三位宮中顧問三島毅撰文，大岡寺，大正5年5月	「奥石神社」社標 （漢文）八日市，大正14年5月
京都	①玉木愛石先生墓誌標（漢文）昭和3年 ②森淑子墓誌銘（漢文）題字，昭和5年12月 ③下間家墓誌銘（漢文）題字，昭和7年4月 ④井上堰水先生記恩碑陰記（漢文），船井郡，昭和8年5月	①「興産紀功之碑」（和文） 従二位子爵平田東助題額・従四位山田登代太郎撰文，阪急桂駅，大正9年5月 ②「北桑田郡置奨学資金記碑」（漢文）京都帝国大学総長従三位荒木寅三郎篆額・同大学教授正五位内藤湖南撰文，京北町，大正10年8月 ③「工学博士田辺朔郎君紀功碑」（和文）京都府知事正四位池松時如撰文，東山，大正12年2月 ④「京都大学記念樟樹之碑」（漢）京都帝国大学総長荒木寅三郎撰文，京都大学，大正12年6月 ⑤「ドクトルワグネル胸像銘」（和文），岡崎，大正13年9月 ⑥「京都植物園設立紀念碑」（和文）京都帝国大学教授鈴木虎雄撰文，植物園，昭和3年10月	①「荒神橋」（漢）鴨川，大正3年10月 ②「史蹟及名勝西芳寺庭園」標石（漢）大正12年9月 ③～⑮：大正13年9月 ③「名勝天橋立」標石（漢文）宮津市 ④「史蹟天皇ノ杜古墳」標石（和）西京 ⑤「史蹟神明山水古墳」標石（漢）丹後 ⑥「史蹟銚子山古墳」標石（漢）竹野郡 ⑦「天然記念物稗田野村堇青石假晶」標石（漢文）亀岡 ⑧「名勝大澤池附名古曾瀧趾」標石（漢文）大覚寺境内 ⑨「史蹟頼山陽書斎山紫水明處」標石（漢文）河原町 ⑩「史蹟伊藤仁斎宅古義堂趾並書庫」標石（漢文）堀川通 ⑪「史蹟荷田東満旧宅」標石（漢）伏見 ⑫「史蹟及名勝平等院庭園」標石（漢文）宇治

14) 香取潤哉「山本竟山在台湾の碑刻書法」，台湾芸術大学『書画芸術学刊』，2006年，329～356頁；香取潤哉「台湾日治時代における山本竟山の活躍とその影響」，『書法漢学研究』2015年，17～19頁。

		⑦「佐野季雄墓誌銘」（漢文） 京都帝国 大学教授狩野直喜撰文，京都植物園内， 昭和3年10月 ⑧「記念」標石（漢文）下鴨，昭和8年 3月	⑬「史蹟及名勝南禪寺庭園」標石（漢） ⑭「史蹟及名勝天龍寺庭園」標石（漢文） ⑮「史蹟及名勝大仙院書院庭園」標石（漢 文）大徳寺内 ⑯「豊国神社」社標（漢文）京都博物館北， 大正14年11月⑰「鳥羽天皇勅領所北向不動 尊」標石（漢文）城南宮，大正15年1月⑱ 「史蹟函石濱遺物包含地」標石（漢文）熊野 郡，昭和4年2月⑲「長尾天満宮」社標（漢 文）醍醐三法院，昭和4年11月⑳「大谷本 廟」標石（漢文）東山，昭和8年4月
東京		「今村有憐先生墓道之碑」（漢）正二位子 爵濱尾新題額・出雲内村資深撰文，巢鴨 大正14年9月	
九州		「菅沼豊次郎氏之記念碑」，昭和4年2 月	

竟山は、主に京都など日本の36ヶ所の碑石に楷書で揮毫し、「名人・事業の記念の碑石」においては、地位の高い華族や有名人が題額・撰文して、それを竟山が書丹するという形の合作が多い。大正期において竟山の書法は、円熟期に達しており、特に揮毫した京都の20ヶ所の名勝や古跡、神社標石の多数は、百年経っても今なお輝いている。さらに、慶応義塾大学の校史である『慶応義塾百年史』¹⁵⁾によれば、福沢諭吉（1835～1901）の誕生地大阪に、昭和4年（1929）に記念碑が大阪医科大学敷地内に建てられた¹⁶⁾。碑は鋳銅製の円塔で、朝倉文夫の設計に成る御影石の台座に置かれ、碑の表面に犬養毅の筆で「福沢先生誕生地」と縦書きし、裏面には鎌田栄吉の撰文を竟山が書いた碑誌を刻した。ただし、この碑は太平洋戦争中銅製品供出により取り払われた¹⁷⁾。

碑石揮毫のほか竟山は、大正から昭和期にかけて、天皇家と外交使節への賀表の代書も依頼されていた。図20は、竟山の代書した一部の原稿であり、計18通の賀表の原稿が現存する。詳細は以下の表（表3）にまとめた。

表 3

順番	宛先	事項	賀表の原作者	年代
①	天皇陛下	東宮弱冠祝賀	京都市長代理京都市助役石川治	大正5年11月3日
②	フランス特派使節	京都帝大光臨への感謝	京都帝大総長荒木寅三郎	大正11年2月
③	イギリス皇太子	京都光臨への感謝	京都府知事若林資蔵	大正11年4月
④	イギリス皇太子	京都帝大光臨への感謝	京都帝大総長荒木寅三郎	同11年4月29日
⑤	天皇皇后両陛下	皇女降誕祝賀	神戸市長石橋為之助	同13年1月20日
⑥	皇太子殿下	納妃祝賀	神戸市長石橋為之助	同⑤

15) 『慶応義塾百年史（中巻・後）』，慶応義塾，1964年，207頁。

16) 10月18日に起工，11月20日竣工し，11月26日除幕式が行なわれた。

17) 戦後，台座だけが空しく残されていることを嘆いた大阪の慶應義塾出身者，大阪慶應倶楽部が中心となって再建の議をまとめ，昭和29年（1954）にようやく建てられたのが現在の「福澤諭吉誕生地」の石碑である。

⑦	皇太子殿下	納妃祝賀	京都市長馬淵鋭太郎	同13年 1月26日
⑧	天皇皇后両陛下	大婚二十五年祝賀	神戸市長石橋為之助	同14年 5月10日
⑨	天皇皇后両陛下	大婚二十五年祝賀	京都市長安田耕之助	同⑧
⑩	皇太子殿下	京都帝大光臨への謝恩	京都帝大総長荒木寅三郎	同14年 5月17日
⑪	天皇陛下	登極大礼に臨幸京都への謝恩	京都高等工芸学校長 村上字一	昭和 3年11月初日
⑫	天皇陛下	同⑪	京都府医師会長菅野弘一	同 3年11月10日
⑬	天皇陛下	同⑪	京都商工会議所会頭 稲垣恒吉	同⑫
⑭	天皇陛下	同⑪	京都市長土岐嘉平	同 3年11月27日
⑮	天皇皇后両陛下	邦彦王殿下死去の哀悼奉表	京都市長土岐嘉平	同 4年 2月 1日
⑯	天皇皇后両陛下	皇女降誕祝賀	京都市長土岐嘉平	同 4年10月 6日
⑰	天皇陛下	臨幸京都への謝恩	京都市長大森吉五郎	同 8年10月20日
⑱	天皇皇后両陛下	皇太子降誕祝賀	京都市長大森吉五郎	同 8年12月20日



図20 (3枚)

以上のように、明治後期から昭和前期にわたり、植民地台湾と日本、特に京都において揮毫や代書を依頼された竟山の足跡をたどってきた。竟山とその碑学書法が、とりわけ当時の関西で支持・信頼され、また書風も広く受け入れられており、異彩を放っていた。

四 書道教育と出版業績

竟山は、1912年冬、台湾から京都に移り、書道教育家として多くの子弟（一万人以上）を指導し、関西書壇にその名を轟かした。門下に専攻系の井上西山、大橋泰山、木村陽山、教養系の佐々木惣一（憲法学者・文化勲章受賞）、湯川秀樹¹⁸⁾（日本初めてのノーベル受賞・物理学賞）等が挙げられる多彩な方面の人たちが集まった。その中から、大橋泰山と湯川秀樹の作品を取り上げてみよう。

図21の作品は竟山に師事する大橋泰山（1909～1993）¹⁹⁾の書作で、按提で線の重量感が引き出され、明るくて浸透する碑学の雰囲気が見える。泰山は、呉昌碩・王一亭諸先生にも教えを受け、文人としての

18) 李白が詠んだ詩『春夜宴桃李園序』の「夫天地者万物之逆旅，光陰者百代之過客」（夫れ天地は万物の逆旅にして，光陰は百代の過客なり）の章句である。湯川秀樹（1907～1981），京都市出身，理論物理学者で，日本人として初めてノーベル賞（物理学）を受賞した（1949年）。

19) 泰山の名は誠一，字は経卿，号は泰山又は泰山人である。

学を修めた。昭和初年、懷徳堂に漢籍を学び、竟山の第七回の中国遊学に際して同行し、碑法帖百件あまりを購入した。旧満州時代、中国で11年間勤務し、数回竟山の購買依頼を受けたことがある。のちに、大阪泰山書道院を創立し、竟山の碑学の伝統を継承して関西で花を咲かせている。図22の作品は、湯川秀樹の書で、竟山の書風と近似しないが、結体の端整さが竟山に近い。湯川先生は小学生の時から、竟山に書を学び、祖父からは四書五経を口授された。漢学の素養を培い、竟山と書芸において切磋琢磨し、生涯にわたって、書道・漢学などの東洋の古典への思索を続けたそうである。図23の資料は、大正11年（1922）1月12日、竟山門下の金曜会が京都市公会堂で第七回試筆展覧会を主催した出品人名録で、百五十名（女性二十名）が列挙された。金曜会は、主に関西を中心とする竟山門下の書道サロンであり、竟山の書学を普及するために、竟山の書作を精選して『金曜会墨林』（第1号～第10号）を上梓した。金曜会の諸活動は、竟山の書道教育の活況を一側面で示している。また、竟山の教育と鑑賞に関する出版事業については、泰山書道院の院長である大橋行成氏の協力で、関係の出版物を整理し、自筆書と収蔵品影印に分類し、それぞれ以下の表4と表5にまとめる（括弧内は発行者）。

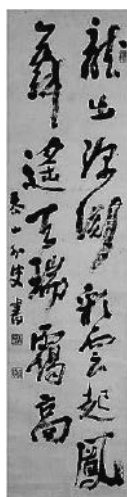


図21

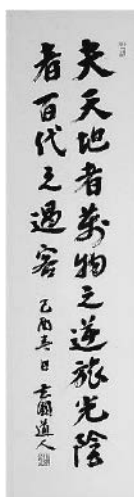


図22

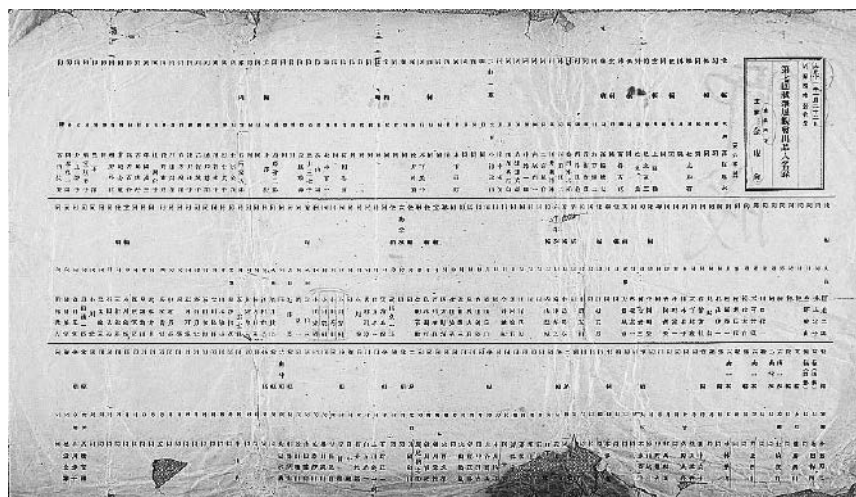


図23 第七回試筆展覧会出品人名録

表4

自筆書（範書・臨書）	刊行年	刊行元
『習字階梯』（上下）	明治43年（1910）8月初版～ 昭和9年（1934）3月第十版	清月堂（山本登與）
『化度寺塔銘節臨』（臨欧陽詢）	大正12年（1923）1月	清月堂（山本登與）
『昭和元年勅語』	昭和2年（1927）3月	清月堂（山本登與）
『心経』	昭和4年（1929）9月	清月堂（山本登與）
『竟山学古』	昭和6年（1931）6月	雄山閣（長坂金雄）
『竟山先生臨本千金帖』	昭和7年（1932）6月	井上清月堂（井上成美）
『臨懷素草書本千字本』	昭和7年（1932）6月	井上清月堂（井上成美）
『雲峰山觀海詩』	昭和7年（1932）11月	臨池会（三宅英佑）
『蘭亭』神龍印本	昭和8年（1933）7月	井上清月堂（井上成美）
『臨蘭亭二種』定武本・張金界本	昭和9年（1934）1月	井上清月堂（井上成美）

『先子臨歐稿』	昭和9年(1934)2月	井上清月堂(山本吉之助)
『書範』(竟山書・長井商山集字)	昭和13年(1938)	印々泥社刊行部(長井商山)
『米海岳巨然海野図詩』(臨米芾)	昭和13年(1938)10月	井上清月堂(井上成美)
『祀三公山碑』	1987年	西東書房

表5 (*は碑学類)

収蔵品景印・集印	刊行年	刊行元
*『潘臨鄭文公下碑』	大正2年(1913)5月	油谷博文堂(油谷達)
『和漢法書展覧会記念帖』	大正3年(1914)2月	油谷博文堂(油谷達)
*『(米芾)研山銘』	大正6年(1917)	不明
『大唐三藏聖教序』	大正7年(1918)10月	井上清月堂刊(山本豊)
*『魏高昇彦造像』	大正9年(1920)1月	井上清月堂刊(井上庄一郎)
『(王黄華)杜詩草書卷』	大正11年(1922)6月	晚翠軒・清月堂(三宅英佑)
『景印餘清斎東坡赤壁賦』	大正11年(1922)7月	井上清月堂刊(井上庄一郎)
*『何道州臨漢碑二種』石門頌, 張遷碑	昭和5年(1930)	鷺見見山跋刊
『宋拓晋唐小楷』	昭和7年(1932)7月	井上清月堂刊(山本豊)
『(顔真卿)争座祭侄二稿』	昭和13年(1938)	駸々堂書店

表4の自筆書は、当時の臨書のテキストとして出版され、出版依頼が少なくなかった。例えば、すでに第六章に紹介した『竟山学古』は、昭和6年(1931)に比田井天来より依頼された楷行草書の臨書テキストで、多くの碑帖を編集・執筆したが、独自の見解による碑帖の解説を付していることが特色である。また、表4の中の最後の四種類は、竟山が亡くなった後に出版されたものである。表5の収蔵品影印類は計十種で、その中の集印『和漢法書展覧会記念帖』を除き、碑学四冊と帖学五冊がある。その中、『宋拓晋唐小楷』は、竟山の「古稀自寿献呈文」であるため、内藤湖南と長尾雨山の跋文が付けられている。また、『景印餘清斎東坡赤壁賦』は、前掲『餘清斎帖』の第7冊に属し、竟山によって抜刷りされた集帖類である。のちに、長尾雨山が主催した赤壁会に展示され、内藤湖南にも一冊を贈ったのである。『潘存臨鄭文公下碑』と『潘存臨争座位帖』は、竟山が楊守敬との約束通りに影印したものであり、今なお日本の書道界で広く普及している。加えて、竟山は、収蔵品影印や集印の出版に対し、コロタイプという製版方法を選択した。すでに第五章で紹介したコロタイプ印刷は、実用化された写真製版としては最も古いもので、作業が繁雑で、大量印刷が不可能であるが、繊細な質感を表現できる点で優れている。

おわりに

以上のように、関西大学の竟山コレクションを利用して、竟山の収蔵、書道会への尽力、碑石揮毫と代書活動、書道教育と出版業績という四つの方面から、竟山とその書学の影響を考察した。竟山の中国での蒐集活動は、特に中国の政情が不安定な時期であったことから、幾多の画期的な成果を結実させた時代でもあった。上海を代表とする中国の文墨サロンが形成されたり、考古資料が相次いで発掘されたりしたことが、竟山の蒐集にとっては、中国書法の方角付けを模索する刺激となったといえよう。今日に至っては、日本各所に散逸し、竟山の膨大な収蔵の全貌を考察することは不可能であるが、現存の資

料によって氷山の一角を理解することができており、竟山の蒐集に投入する情熱と財力も明らかになる。

竟山は、日中両国での夥しい蒐集を通して、大正・昭和期の日本書道界に刺激を与えつつ、その中の優れたものを広く人々に伝えた。大正期の京都蘭亭会・和漢法書展覧会・赤壁会・寿蘇会・清朝書画会においては、積極的に蒐集品の展示に協力した。また、自分の鑑識眼と書法を鍛え、政治家・書画家・文学者との交流のネットワークで人脈を築いた。加えて、日中の有名な書家に師事した上、竟山は日本国内での人望が厚く、書道界への影響力をもった。竟山は大正・昭和にかけて書道会を発起し、複数の書道会の顧問や審査員（長）を担当したことは、書道界での活躍ぶりを示している。また、竟山の書道界の位置付けと、近代の主要書道団体の成立、展開及びその変遷の一側面が窺える。

明治後期から昭和前期にわたり、植民地台湾と日本、特に京都において揮毫や代書を依頼されたことから、竟山とその碑学書法がとりわけ当時の関西で支持、信頼され、書風も広く受け入れられたと言える。さらに、竟山は、熱心に書道教育と出版事業に携わっており、質も量も抜群で、書芸の真髄と妙所を伝えていた。収蔵、審査、揮毫、教育、出版などの面における竟山の多岐にわたる働きは、大正・昭和期に活躍しており、人々に尊敬され、関西書道界の巨人として異彩を放っていた。

[追記] 中谷伸生教授や諸先生の企画の下、山本宗生氏（竟山の孫）は、山本竟山の資料（史料）を関西大学に寄付され、関西大学博物館に竟山コレクションを設置されました。特に、中谷先生は、最初の受け入れから最後の入庫まで、大変尽力されました。私は参加者の一員として、先生にあらゆる方面でお世話になりました。この度、中谷先生のご退職にあたり、深く尊敬と感謝の意を表します。

